

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03359

研究課題名(和文)近代日本の学知と中国ナショナリズム 中国社会論と東洋史学の交叉点から

研究課題名(英文)Scientific knowledge of modern Japan and Chinese Nationalism -From the intersection of China social theory and Oriental history-

研究代表者

小嶋 茂稔(KOJIMA, Shigetoshi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：20312720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、わが国の戦前期、特に1930年にその学的営為を始めた中国を対象とする研究者の著した学術論文や著書を分析の対象とし、その中国ナショナリズム理解に焦点を当てて分析を行ったものである。なかでも、中国文学研究者である竹内好については、本研究の期間中に、1冊の論文集と1冊の評伝を公刊することができ、歴史学者が行った竹内の研究として、一定の評価を得ることができた。

また、竹内を対象とする分析の他、尾崎秀実の言説における当時の歴史学の成果の影響への分析や、1930年代の総合雑誌に掲載された中国社会論や東洋史学における中国認識の分析も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

竹内好に代表される、1930年代にその学的営為を開始した中国を研究対象とする研究者の研究成果を、その中国ナショナリズム理解に焦点をあてつつ分析を行った研究である。特に、竹内好については、研究代表者・分担者・協力者全員による論文集(『竹内好とその時代 歴史学との対話』有志舎、2018年)と、二人の分担者による共著『評伝竹内好 その思想と生涯』(有志舎、2020年)として、一般の読者にもわかりやすく研究成果を明示しているが、この点を、この研究の学術的意義ならびに社会的意義として位置付けることができる。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the scientific paper and work which the researcher who began the research for China in the 1930s wrote. We focused on an understanding to their China nationalism at that time. Especially about Yoshimi Takeuchi who is a Chinese literature researcher, we could publish the collected papers of one volume, and the critical biography of one volume during this research, and was able to obtain friendly evaluation as Takeuchi's research which the historian did. Moreover, we also analyzed the influence of the result of the history of those days seen in Hotsumi Ozaki's besides the analysis for Takeuchi. In addition, we analyzed the China social theory published at the general magazine of the 1930s. Moreover, we also conducted analysis of the China recognition in an Oriental historian of those days.

研究分野：中国古代史 近代日本のアジア認識

キーワード：近代日本の中国認識 近代日本のアジア認識 近代東洋史学史 竹内好 尾崎秀実 アジア主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明治以降昭和戦前期までの日本の中国認識のあり方を省察することは思想史研究に常に課せられている大きな課題である(この点は、研究開始当初のみならず、現時点においても変わるものではない)。かつて野村浩一は、尾崎秀実を論じた「尾崎秀実と中国」(『尾崎秀実著作集』第二巻の解説、勁草書房、1977)の中で、中国の民族運動を理解することは、「近代日本において(中略)ついに人々が決して十分に把握しきれない問題」であったと語った。また、制度化された明治期以降の学術体制のもとで進められた中国に対する戦前の諸研究が、ついに中国ナショナリズムを内面的に理解することができなかつたことは、増淵龍夫が『歴史家の同時代史的考察について』(岩波書店、1983)に収録された諸論考において、津田左右吉や内藤湖南を対象に論じたとおりである。日中相互のナショナリズムの相剋が著しくなった21世紀の今日であればこそ、かつての日本の学知がどのように中国ナショナリズムを理解しようとしたか、そしてその理解の妥当性を今日的視点から明らかにすることは、重要な学問的課題である。

本研究課題の研究代表者・分担者・協力者は、本研究に着手する以前に、思想史的観点から、近代日本を代表する中国史研究者の一人である内藤湖南の再読解を進め、その成果を2013年に、山田智・黒川みどり編『内藤湖南とアジア認識-日本近代思想史からみる-』(勉誠出版、2013)として公刊した。同書に収録された研究分担者の黒川みどり・田澤晴子・山田智、研究協力者の姜海守の諸論考は、内藤湖南の諸論考の丁寧な読解を通して、その中国認識(あわせて朝鮮認識の"歪み"を改めて明示した他、研究代表者の小嶋茂穂は、明治から大正にかけて制度化された「東洋史」とは異なる、中国史に軸足を置いた内藤湖南の「東洋史」認識の特異性を明らかにした。

本研究は、そうした史学史の方法を用いて内藤湖南にまつわる「神話」を鮮やかに解体した実績を踏まえつつ、思想史的方法と史学史的方法を交叉させることによって、制度化された学術・高等教育体制のもとで中国を研究対象とした研究者群が、中国ナショナリズムにどのように向かい合い、かつ理解したか/理解不能であったのかを明らかにすることを通して、近代日本の中国認識のあり方の新たな側面を明らかにしようとして着手されたものであった。

2. 研究の目的

本研究課題の申請時における当初の研究目的は、以下のとおりである。

- (1) 戦前期に学問形成を進めた中国文学者(竹内好など)や東洋史学者(野原四郎など)における、同時期の中国ナショナリズム理解の具体相を明らかにする。
- (2) 戦前期「支那社会論」で顕著な業績を残し中国ナショナリズムへも深い理解を有した尾崎秀実らが、制度化された学術による研究成果を、どのように認識していたかを明らかにする。
- (3) 「東洋史学」「支那学(「支那文学」を含む)」「支那社会論」に見られるマルクス主義への同調の濃淡と、中国ナショナリズムへの認識の深浅との関わりを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 戦前に研究活動を始め、戦前から戦後にかけて中国に向かい合った中国文学や東洋史学の研究者-特に竹内好を中心にしながら野原四郎なども射程に入れる-の著作を精読する。竹内好や野原四郎は中国社会論や東洋史学の高揚期であった1930年代に本格的に中国に関わる学術研究の世界に入り、戦後は、戦前の中国研究を批判しながら多くの成果を発信した。戦前の正統な教育経路を経て中国研究の道に入った彼らの戦前の中国理解のあり方と、その戦後の変容を明らかにすることにより、中国ナショナリズムに対する戦前日本の「学知」の持った限界と可能性とを明らかにすることが期待される。なお、読解にあたっては、戦前期の研究については、当該著者の中国ナショナリズム認識、戦後の研究については、敗戦/中華人民共和国の成立/朝鮮半島の南北分断/アジア・アフリカ諸国の独立、という事態を当該著者がどのように認識しているか、に注目しながら進めていく。

(2) 東洋史学の成果を意識しつつ中国社会論を展開した論者として、特に尾崎秀実のものを精読する。主たる読解の対象として、『尾崎秀実著作集』全5巻(勁草書房、1977~79)に収録された『嵐に立つ支那』『国際関係から見た支那』『現代支那批判』『現代支那論』などとする。尾崎秀実については、今井清一・藤井昇三『尾崎秀実の中国研究』(アジア経済研究所、1983)や宮西義雄『満鉄調査部と尾崎秀実』(亜紀書房、1983)などの研究によって、その中国認識のあり方や調査活動の背景などについては明らかにされているが、それらを踏まえつつ、伝統的東洋学や東洋史学の成果を尾崎がどのように摂取しつつ、現実の中国や中国ナショナリズムと向き合ったかを読み取っていくこととする。

(3) 戦前の中国社会論や、中国社会論を意識しつつ研究を進めた戦前の東洋史学の諸成果を精読する。前者については、『中央公論』や『改造』などの総合雑誌に掲載された「中国社会論」を研究対象とし、後者については、いわゆる「戦後歴史学」につらなる活動を行ったとされる戦前の歴史学研究会に拠って研究活動を行った東洋史研究者や、渡部義通らの研究グループとも交流を持ったとされる秋沢修二らの研究成果を対象として検討を進めることとする。

(4) 研究対象の読解については、研究代表者・分担者・協力者の個々の問題意識や読解の深度を互いに尊重するとともに、定期的に研究会を開催し、研究対象のテキストの読解を相互に確認し、認識を深化させる。1箇月に1回程度、東京(東京学芸大学もしくはキャンパスイノベーションセンター静岡大学事務所)で研究会を開催して、研究対象のテキストの読解を相互に確認し、認識を深化させるとともに、研究の進捗状況も相互に確認する。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果の一つは、中国文学研究者竹内好が遺した、学生時代から晩年に至るまでの諸作品の読解を共同で進めた結果として、研究代表者・分担者・協力者合計6名の手による論文集『竹内好とその時代 歴史学からの対話』(有志舎、2018年)を刊行したことである。以下、本書の内容を紹介する。

本書は、「総論」、「第一部 生涯と思想 評伝編」、「第二部 思想と近現代史 各論編」からなる。

「総論 竹内好と<歴史学>との対話」は、研究分担者の山田智が執筆し「1「歴史家」の発見 楊聯陞・顧頡剛と中江丑吉」「2「歴史家」との交差 丸山眞男・石母田正と戦後歴史学」「3「歴史」の発見と「歴史」との交錯 歴史の中の竹内好」の3節からなる。山田は、竹内が「少なからざる歴史学研究者と交流を持ち、またその研究成果にも触れたが、決して歴史の『専門家』の見立てに臆することも、またかぶれることもなく、彼自身の歴史観を貫くことができた」(同書2頁)と評する。そのうえで、竹内が「作品に込められた主観を自らの思想と対峙させて把握する、文学研究者としての立場」ゆえに、同時代に全盛を極めた社会経済史ではなく、例えば、歴史とは焔を異にする政治学分野の政治思想史に従事した丸山眞男との交流を積極的に行ったこと、中国史の領域から「自らの身を中国に置きつつ日本のアカデミズム歴史学に背を向けた」(同書2頁)中江丑吉への傾斜、「法制史という立場から中国の歴史社会の把握に積極的に取り組んだ」(同書2頁)仁井田陞への高い評価を指摘する。また、戦前の竹内の北京留学中の楊聯陞との交流の竹内の思想形成に与えた影響を指摘したことも、この山田論文の重要な成果である。多くの歴史学研究者との交流を行った非歴史学研究者であった竹内の中国観について、山田は、「竹内の時代に主流であった社会経済史的な歴史学的方法に依らなかったにもかかわらず極めて『歴史』的であった。中国の近代化の歴史の現実を文学に現れた『思想』を通じて動的にとらえる竹内の手法は、その視点を中国にとどまらずに日本をも射程に入れ、さらに広く世界へと拡大してゆく普遍的な世界史認識に昇華してゆくものとなった」(同書30頁)と位置付けている。

「第一部 生涯と思想 評伝編」には、研究代表者の小嶋茂稔による「一<魯迅>にいたる道 復員まで」と、研究分担者の黒川みどりによる「二<ドレイ>からの脱却を求めて 戦後社会のなかで」が収録されている。

小嶋の「<魯迅>にいたる道」は、1943年に応召して中国に従軍した竹内が、復員後、魯迅の諸作品の再読解を進めて、「ドレイ」論を提起するまでの時期を対象に、竹内の学的経歴や思想形成の過程を述べたものであり、前半の「1竹内好と魯迅」「2中国文学との出会いに至るまで」「3中国文学研究会の結成と『漢学』『支那学』との対峙」「4北京留学と帰国後の竹内」「5一九四〇年代の竹内 復員まで」において、主として、竹内の伝記的事項を述べ、後半の「6「魯迅論」から『魯迅』へ」「7『魯迅』から『魯迅入門』『魯迅雑記』へ」「ドレイ」論の確立」で、竹内の魯迅理解の変容と、「ドレイ」論の確立の過程を述べたものである。

黒川の「<ドレイ>からの脱却を求めて 戦後社会のなかで」は、小嶋論文が論じた竹内の復員前後の時期からその逝去までの時期を対象とし、「1『インテリ』と民衆」「2『個人の独立』と『国民的連帯』」「3『戦争の二重性格』というアポリアに向き合って」「4市民的自由の獲得のために「不服従の遺産」」「5闘いのあと『民族再生』の希求」の5節に亘って、戦後の竹内の思想について述べたものであり、「竹内好は、中国との戦争の真の意味でも終結を求めて戦後社会に向き合ってきた、彼が魯迅に学びつつ、かつ丸山眞男との親交のなかから求め続けてきたのは、「いやなものはいやだといえる」“ひとり”で闘う精神、すなわち「人格の独立」であった。そして、竹内が喚起した『ナショナリズム』や『民族』も、あくまでそれらを引き出すための手段なのであった」(同書199頁)と、竹内の戦後の思想的歩みを位置付けている。

「第二部 思想と近現代史 各論編」には、研究分担者の廣木尚による「<共通の広場>の模索 竹内好と第三次『思想の科学』」、同じく研究分担者の田澤晴子による「明治維新論の展開」、研究協力者の姜海守による「<朝鮮>というトポスからみた『方法としてのアジア』」を収録した。

廣木の「<共通の広場>の模索 竹内好と第三次『思想の科学』」は、「1国民文学論争と『共通の広場』」「2思想の科学研究会への『合流』」「3応答と反響 第三次『思想の科学』という場」「4『広場』の強度 『サンデー毎日』事件をめぐる葛藤」「5“大合流”の精神」の5節からなり、「竹内が国民文学論争の渦中で唱えた『共通の広場』という理念を、普遍的価値の基盤を概念化したものとして捉え、五〇年代中葉の竹内が精力を注いだ思想の科学研究会での活動に『共通の広場』の実現のための実践」(同書215頁)を読み取ることにより、竹内が「連帯意識」の歴史的探究へと向かわせた動機自体の意味を考えようとするものである。

田澤の「明治維新論の展開」は、「1『屈辱の事件』から『明治百年祭』へ」「2『アジア主義』への結実」の2節からなり、竹内が「明治の精神」を日本の伝統として認識するに至る過程を検討し、あわせて、竹内の明治維新論が「日本のアジア主義」に結実する過程について検討したものである。

姜の「<朝鮮>というトポスからみた『方法としてのアジア』」は、「1竹内の朝鮮(韓国)認識と日本の『植民地主義』」「2『連帯意識』の語りとしての『アジア主義』論と朝鮮」「3『歴史学』と『歴史主義』との間で」「4『危機神学的な』態度と『未来的意義』による回答」「5韓国における『ポスト竹内』言説の受容が示唆するもの むすびに代えて」の5節からなり、竹内

の述べた「方法としてのアジア」や「アジア主義」論のあり方を「韓国・朝鮮」というトポスから照明を当てつつ、「竹内が「アジア主義」論および「方法としてのアジア」を通して提起しようとした問題を、今日の「韓国の問い」として検討し、その意味を改めて問うことを試み」（同書 282 頁）ようとしたものである。

本書の反響は大きく、刊行直後、朝日新聞の 2018 年 4 月 21 日号の読書欄に、間宮陽介氏の書評が掲載されたほか、萩原稔（『図書新聞』3367、2018 年 9 月 5 日）、井岡康時（「竹内好の可能性を考える 黒川みどり・山田智編『竹内好とその時代 歴史学からの対話』を読む」『部落解放』762、2018 年 9 月）、川上哲正（『中国研究月報』847、2018 年 9 月号）、鈴木将久（『歴史評論』第 831 号、2019 年 7 月号）の諸氏による書評が公開されている。

（2）本研究のもう一つの大きな成果は、研究分担者の黒川みどりと山田智によって刊行された『評伝 竹内好 その思想と生涯』（有志舎、2020 年 2 月）である。同書は、「序 1 中国と向きあう 2 日本と向きあう」「第一章 生い立ちから戦争体験へ（1910～1945 年）1 生い立ちから大阪高校卒業まで 2 「中国」との出会い 3 戦中の中国と向き合う 4 『魯迅』と戦場経験」「第二章 「戦後」からの出発（1945～1960 年）1 「インテリ」と民衆 2 「翻訳の時代」3 「個人の独立」と「国民的連帯」」「第三章 「市民的自由」と「民族」（1960～1977 年）1 方法としてのアジア 丸山眞男との交流のなかで 2 「不服従の遺産」/日本近代のとらえなおし 3 『中国』から個人訳『魯迅文集』へ」からなり、本研究での研究成果を活用しつつ、竹内の思想の展開に重きをおいた評伝となっている。

（3）本研究では、竹内好の他、尾崎秀実、秋沢修二、1930 年代に『中央公論』等に発表された中国社会論、頭山満・内田良平・杉山茂丸・宮崎滔天などアジア主義者と呼ばれる論者の遺した論考等も検討した。ただ、その成果を、研究期間中に、全体としてとりまとめることはかなわなかったが、研究代表者・分担者の個々の研究成果の中で活用しているところである。なお、研究期間終了後も、研究代表者・分担者・協力者による共同研究は継続することとなっており、その過程で、本研究期間中に得られた成果の集約を進めることとしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 37
2. 論文標題 帝国主義成立期の部落問題認識 「習慣八第二ノ天性ナリ」 柳瀬勤介『社会外の社会穢多非人』にみる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀部落解放研究所紀要	6. 最初と最後の頁 24-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋茂稔	4. 巻 20
2. 論文標題 漢代の刺史の兵権行使に関する再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本秦漢史研究	6. 最初と最後の頁 117-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋茂稔	4. 巻 837
2. 論文標題 「「共同体」論争」の意義と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 32-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋茂稔	4. 巻 3402
2. 論文標題 (書評) 藤間生大著・磯前順一・山本昭宏編『希望の歴史学』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子・辻本諭	4. 巻 68-2
2. 論文標題 満蒙開拓団の体験を学校教育でどう教えるか 日本近代海外移民史の学習を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姜海守	4. 巻 60
2. 論文標題 近代日本の 東亜の朱子学 と李退溪 「崎門」および「熊本実学派」における李退溪をめぐる議論と「道義」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 95-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15055/00007456	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田泰三・田澤晴子・平野敬和・藤村一郎	4. 巻 49-4
2. 論文標題 インタビュー 飯田泰三氏インタビュー記録：近代日本政治思想史をふり返る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会科学	6. 最初と最後の頁 283-305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.14988/pa.2019.0000000642	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺剛・廣木尚	4. 巻 51
2. 論文標題 資料紹介 藤川寛宛津田左右吉書簡 翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学史記要	6. 最初と最後の頁 206-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子・平野敬和・藤村一郎	4. 巻 48
2. 論文標題 三谷太郎氏インタビュー記録 大正デモクラシー研究をふり返る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会科学	6. 最初と最後の頁 307-331
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子	4. 巻 5
2. 論文標題 文化史学と中国研究 津田左右吉『支那思想と日本』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 津田左右吉とアジアの人 文学	6. 最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田智	4. 巻 3392
2. 論文標題 書評『内藤湖南未収録文集』 図書新聞3392 (2019年3月23日)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋茂稔	4. 巻
2. 論文標題 書評・藤間生大著・磯前順一・山本昭宏編『希望の歴史学』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 397
2. 論文標題 米騒動の時代から100年 社会的デモクラシーの展開と屈折	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊東京	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 144
2. 論文標題 部落問題を普遍的課題に 竹内好を手がかりに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季報唯物論研究	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 50
2. 論文標題 大山郁夫と早稲田大学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学史紀要	6. 最初と最後の頁 101-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋茂稔・戸邊秀明	4. 巻 800
2. 論文標題 藤間生大さんに聞く『歴史評論』の青春時代	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 18-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 1115
2. 論文標題 丸山眞男における「開かれた社会」 竹内好との対話をとおして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 67-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒川みどり	4. 巻 801
2. 論文標題 部落史から考える日本の近代社会	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 32-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田智	4. 巻 67
2. 論文標題 竹内好と楊聯陞	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇)	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 黒川みどり
2. 発表標題 戦後日本の知識人と朝鮮 / アジア 「他者感覚」を手がかりに
3. 学会等名 韓国東北歴史財団 第4回歴史和解のための韓日フォーラム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒川みどり
2. 発表標題 近代社会における部落差別と人種主義
3. 学会等名 特定非営利活動法人社会理論・動態研究所（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒川みどり
2. 発表標題 戦後思想史の構想
3. 学会等名 東北アジア歴史財団 第2回歴史和解のための日韓フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田澤晴子
2. 発表標題 内藤湖南と津田左右吉
3. 学会等名 私立大学戦略的研究基盤形成事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏 東アジアにおける人文学の危機と再生」研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姜海守
2. 発表標題 Recreation of Morality(道義) Discourses and the Representation of Yi Toegy within the Post-1945 Context of Korea and Japan
3. 学会等名 Association for Asian Studies in Seoul (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒川みどり
2. 発表標題 三重県厚生会と戦後の同和行政・解放運動
3. 学会等名 第23回全国部落史研究大会近現代史部会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒川みどり
2. 発表標題 兼子歩 / 貴堂嘉之編 『「ヘイト」時代のアメリカ史 人種・民族・国籍を考える』（彩流社、2017年）へのコメント
3. 学会等名 日本アメリカ史学会第40回例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 黒川みどり・山田智	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 372
3. 書名 評伝竹内好 その思想と生涯	

1. 著者名 歴史科学協議会・山田敬男・小嶋茂稔	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 595
3. 書名 歴史科学の思想と運動	

1. 著者名 高木博志、幡鎌一弘、本康宏史、上田長生、尾谷雅比古、市川秀之、能川泰治、廣木尚、福家崇洋、中野慎之、田中智子、池田さなえ、ジョン・ブリン、平山昇、遠藤俊六、河西秀哉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 528
3. 書名 近代天皇制と社会	

1. 著者名 廣木尚、陣野英則、甚野尚志、伊川健二、渡邊義浩、飯山知保、新川登亀男、上原麻有子、冬木ひろみ、常田楨子、橋本一径、パトリック・シュウェマー、雪嶋宏一、牧野元紀、河野貴美子、小山騰、和田敦彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 近代人文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書	

1. 著者名 寺木信明、畑中敏之、上杉聰、井岡康時、黒川みどり、木津謙、内田龍史、本多和明、住田一郎、川口泰司、戸田栄、中尾由喜雄、二宮周平、阪本仁、朝治武、李嘉永、小野利明、友永健三、内田博文、丹羽雅雄、谷元昭信、赤井隆史、伊藤満	4. 発行年 2018年
2. 出版社 解放出版社	5. 総ページ数 437
3. 書名 部落解放論の最前線 多角的な視点からの展開	

1. 著者名 田澤晴子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 309
3. 書名 吉野作造と柳田国男 大正デモクラシーが生んだ「在野の精神」	

1. 著者名 黒川みどり・山田智・小嶋茂稔・廣木尚・田澤晴子・姜海守	4. 発行年 2018年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 316
3. 書名 竹内好とその時代 歴史学からの対話	

1. 著者名 赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり・戸邊秀明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 260
3. 書名 触発する歴史学 鹿野思想史と向きあう	

1. 著者名 加藤圭木・加藤玄・鎌倉佐保・川手圭一・小嶋茂稔・斉藤恵太・佐々木真・志賀美和子・土屋健俊・津野田興一・本庄十喜・源川真希・割田聖史	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 221 (151-164, 176-185)
3. 書名 わかる・身につく歴史学の学び方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣木 尚 (HIROKI Takashi) (00756356)	早稲田大学・大学史資料センター・講師(任期付) (32689)	
研究分担者	田澤 晴子 (TAZAWA Haruko) (40737160)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	

6. 研究組織(つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	黒川 みどり (KUROKAWA Midori) (60283321)	静岡大学・教育学部・教授 (13801)	
研究 分担者	山田 智 (YAMADA Satoshi) (90625211)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	
研究 協力者	姜 海守 (KANG Haesoo)		